

侍る長歌。

千はやふる、神代のまゝにうごきなき、やまとしまねの
 ことの葉を、とほつおやよりうけつぎて、としをかさぬ
 る家のかぜ、ふきのこしつゝ一すぢに、たえせぬみちと
 なりにけり。しかはあれども末つひに、おろかなるべき
 おしへにと、かきながしけんいにしへの、なごりいづこ
 としらなみの、よるべをとほくたどる身に、今せきかへ
 す水ぐきの、あともさだかにあきらけき、月のおもかけ
 手にとりて、まぢかくむかふますかどみ、かけてあふげ
 ばいやたかき、樹の下つゆのめぐみをば、せばきたもと
 につゝみては、おきどころなきうれしさも、いかでこと
 葉にのばへまし。なほさかふべき日のもとの、國をため
 しにいく春も、わかのみちさへ色そへて、君につかふる
 ことわざの、つきせぬたねと世々につたへん。

反歌

まほに吹く惠の風の便りゆゑよるべまさしきわかか浦舟
 右は丁未十一月、大家以定家卿所自書長短歌之説、賜其
 孫冷泉家久。以價千金買之云。

一、甘露の降れるを壽ぐ歌

今茲己酉五月十一日夜、城州北山より丹波國へかけて甘露
 降候。但馬國よりも特に多く降凝候枝を、法皇御所へ獻之
 候。九十九年前にも降申由。木葉に米糊の如くに凝有之候
 旨也。

法皇御製

とれど猶解ぬ露をば世々にともみばや盡せで有しためしに
 百とせに一とせたらで今みるも思ふにまれの露のふる言

中院前内大臣通躬

誰も今めなれぬ露に天地のあひにあひたる時をしるらん
 めづしく今はたふるも壽に祝ふためしのつゆとやは見ぬ

三條西大納言公福

今ふるも齡をのぶる露ぞとも君こそしらめ千世を重ねて
 ためしさへ稀なる露のかゝる世を幾度君は待つてみん

烏丸大納言光榮

仙人のうくるもおなじ露を今手にとる君が千世は幾千世
 月の中に葉やかくる天の河波にはあらぬつゆもおくらん
 うるふ世の惠ことなる天の露おしなべてしれ民の草葉も

武者小路大納言實隆

時しあれば唐土遠き年の號に降りぬる露も今見てぞしる
 ありとて昔はしらす君が代に老も若えん露はみそめつ

冷泉前中納言爲久

年の號のためしに人の壽を今もそへよと降れるつゆかも
 あぢはひの甘きをなせる民草にいと惠のつゆぞ加はる

武者小路三位公野

君が手に任せて千世を此洞の松よりかゝる露やみすらん
 かけて今草にもしるや人の世の齡のぶてふ露のめぐみを

一、葛巻昌興の東路紀行

東路紀行

葛 有 禎

長月廿日あまり七日といふ朝、ふるさに歸るとて、むさ
 しの國を旅立侍るに、庭の菊のいまださかりなりけるを見
 て、むすび付侍ける。

秋もまたくれ行ものをたが爲にまだ咲のこる庭のしら菊
 限ある卯月をさへ、いつしかと待ちわたり侍りしに、長月
 の有明の月をだに待いで侍りしかば、いとどながき夜の草
 のまくらに、心づからの露も置所なき心地するなど、人も

皆佗あへりしかど、馴來つれば名残おほかるやうにて。

秋の夜のながきを佗し旅寝さへ馴て今は名残をぞ思ふ
 菊池武康俗稱十郎は、御留守のかためうけ給りて侍りけるまゝ、
 餘波申けるついでに書きつく。

古郷の軒端の草はしげくともしのぶに堪へじ武藏野の月
 返し

古郷におもひ出れば武藏野の月のゆかりと成もこそせめ
 あかつき本郷を旅立ち板橋の里を出て、遙にうちわたすほ
 どあめそぼふる。青葉まれなる尾花ばかりの氣しき、いと
 うちしぐれたり。

袖さむき尾花が末の秋かぜに雨きほひくるむさしの原
 廿八日。けふは空もいとよく晴れたり。今朝桶川といふ御
 旅館にいままだ侍りける程、嵐はげしくて木の葉のひまなく
 散りけるを見て。

木の葉散る音にしほるゝ旅衣しぐれ空しき昨日今日かな
 能谷より竹田忠張五郎左衛門・土方氏陳勲等と後驕を勤む。深谷
 を過て小出川といふ川うちわたして行くに、日は西の山の
 端に入果て、山際のろう／＼とうす霧あひたるに、いくへ